

聖書箇所：創世記 49 章 8～12 節

説教題：ユダの子孫として

1 ヤコブ

今日から待降節が始まります。旧約の時代、人々は救い主キリストが来てくださることを待ち望んでおりました。私たちも大先輩たちの信仰にならい、一年に一度、そのような時を持ちます。

それは何も昔のことを偲んで、あるいは思い出してと懐かしむというような意味ではありません。私たち自身もいまキリストの到来を待ち望んで日々を過ごすという立場にあります。二千年前確かにこの方は来てくださいました。それは私たちの罪のゆえに十字架でさばきを受けるためでした。けれども、その方はもう一度来られる。こんどは私たちを天の御国に招くため。その事を再臨と呼んでおりますが、それが私たちがいただいている大切な約束であるわけです。

今日から三回にわたり旧約聖書を開き、信仰の大先輩たちがどのようにキリストを待ち望んでいたのかを見て参ります。今日はその第一回目として、創世記を開き、ヤコブという人に目を留めます。ヤコブはいま、波瀾万丈に満ちた生涯を閉じようとしています。培ってきた信仰を子供たち孫たちに手渡そうとしています。しかし、若いときからすばらしい信仰者であったわけではありません。

ヤコブにはエサウという双子の兄がおりました。あるとき、ヤコブはエサウをだまし、父をだまして、大切な長子の権利をまんまと自分のものとします。その事を知った兄のエサウは、怒りに燃えヤコブを殺そうとします

が後の祭り。ヤコブは雲隠れしてしまいます。

兄エサウも愚かと言えば愚かな人間ですが、弟ヤコブのほうも相当の悪党です。自分の幸せのためであるなら、兄をだまし、父をだましても平気です。反省することもなければ、謝罪のことばもない。こんな人が神の祝福をいただくはずはない。こんな人間こそ地獄に落ちるはずだと普通は思います。

しかし驚くべきことに、こんなヤコブが救われていきます。そしてヤコブは自分のいのちの日が長くはないことを悟ったとき、息子たちを枕元に呼び、息子たちの将来のことについて語り始めます。

2 ダビデが現れる

ヤコブは十二人の息子たちひとりひとりに語りかけます。そのうちの8節から12節が、ヤコブの四番目の息子であるユダに語っている部分。なぜ今日わざわざユダの箇所にと絞ったのか、理由があります。イエス・キリストは、ユダの子孫として来られたということがマタイの福音書1章の系図に書かれているからです。

10節。「王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。ついにはシロが来て、国々の民は彼に従う。」

前半はなんとなく意味は理解できるでしょう。ユダの子孫がやがて王権を握ることになる、そのように読めます。イスラエル王国の王様がユダの子孫から出ることになる。

ヤコブがこれを語ったとき、この一家はど

んな状態だったのでしょう。自分の家族からやがて王となるものが現れる。そんなことを聞いても笑われてしまうほどの小さな部族に過ぎません。そもそもヤコブの時代、国という一つのまとまったものなどなかった時代です。親戚同士が寄り集まって一つの地域に暮らす。それがすべてでした。そんな状態の中で、おまえの子孫はやがてイスラエル国の王となるのだと聞かされても、夢物語にしか聞こえない。そんな内容です。

10 節後半を見ましょう。「ついにシロが来て、国々の民は彼に従う。」実は、この文章を巡って多くの研究者たちが頭を悩ませている。シロという町は確かにあるのですが、「シロが来て」と翻訳しようとする、文法的につじつまが合わないのです。最新の研究では、「ついにこの方に属する人々をご自分のものとされる」と訳すべきだと提案されています。

いずれにしても彼という者に人々が従うことになるということを言っています。将来やがてユダの子孫からはそれくらいの力を持った王様が出る。そのような預言です。

さて問題は、ヤコブが語ったことは、実際にそのとおりになったのかどうかです。もし、ヤコブの語ったとおりにならなかったというのなら、聖書を真剣に読むことなどばかばかしい。聖書はなんの価値もない。本屋さんで売っている小説といっしょです。

もちろんそんなことはない。ヤコブが語ったことがそのまま実現しました。みなさんご存じのダビデです。彼がイスラエルの王様となりました。ダビデはどこ出身か。ユダ族の出身です。ダビデが生まれたのは、ヤコブの時代から下ることおよそ千年です。ヤコブは千年先のことを正しく語ったことになる。

ある方は疑うかもしれない。ダビデが王様になってから、実は大昔にヤコブはこう語っていましたと、後になってから書いたのではないか。そういうことはありません。ダビデが生まれる千年前に書かれていたのです。そして、人々はヤコブのことばを聞き、やがて確かにこうなると人々は信じ続けていった。いつ実現するのかはわかりません。わからなくても待ち続ける。これが私たちの大先輩たちの信仰でした。驚きます。

旧約聖書には、イスラエルの人たちがいかにも不信仰でかたくなであったかが、繰り返し書かれています。そこだけ読めば、イスラエルはなんと不信仰な人たちだと思います。確かに、ひどい罪を重ねた人たちではあるのですが、すばらしい面もある。信仰という面では大きな問題はあったにせよ、ヤコブのことばを信じ、千年間忍耐強く待ち望んでいった事実は忘れてはなりません。

ヤコブが語った 10 節のことばは、千年の後に現れたダビデによって実現しました。

3 救い主が来られる

(1) ろばをぶどうの木につなぐ

次に 11 節を見ます。「彼はそのろばをぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子を、よいぶどうの木につなぐ。彼はそのころもをぶどうの血で洗う。」

みなさんは、10 節から 11 節へ読み進むとき、すんなり内容を理解できるでしょうか。私は戸惑います。というのは、10 節と内容が繋がっていないように見えるからです。11 節で、いきなりろばとぶどうの木が出て来る。そもそもいったい彼とは誰のことか。ヤコブは何も言いません。おそらく、ヤコブが語っているのをそばで聞いていた十二人

の息子たちも、わからなかったはずですが、それでも、ヤコブが語ったとおりに記録します。たとえ意味がわからなくても、大切な意味があるに違いないと信じて、手を加えることなくそのまま記録しました。そして子から孫へと伝えていきます。伝えるだけではなく、やがてこのことは実現すると信じます。待ち続けます。さて、いったいいつ実現したのでしょうか。

ヤコブの時代から二千年後、救い主キリストが来られました。マルコ 11 章 1〜7 節をお読みします。「さて、彼らがエルサレムの近くに来て、オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニヤに近づいたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が、つないであるのに気がつくでしょう。それをほどいて、引いて来なさい。もし、『なぜそんなことをするのか』と言う人があったら、『主がお入用なのです。すぐに、またここに送り返されます』と言いなさい。」そこで、出かけて見ると、表通りにある家の戸口に、ろばの子が一匹つないであったので、それをほどいた。すると、そこに立っていた何人かが言った。「ろばの子をほどいたりして、どうするのですか。」弟子たちが、イエスの言われたとおりを話すと、彼らは許してくれた。そこで、ろばの子をイエスのところへ引いて行って、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。」

しかし実を言うと、いきなり 11 節の前半を読んで、これは救い主キリストのことだと言うにはちょっと問題がある。なぜなら誰でも、ろばの子をさがしてきてぶどうの木につ

なぎ、「ほら、ヤコブの預言のとおりになりました」と言うことが簡単にできるからです。

(2) 衣をぶどうの血で洗う

しかし 11 節後半の内容を見たとき、これは簡単なことではないとわかります。「彼はその着物を、ぶどう酒で洗い、その衣をぶどうの血で洗う。」着物を染める目的でぶどう酒にひたすことがあると聞いたことがあります。着物をぶどう酒で洗うと表現してもおかしくない。これは誰でも比較的簡単にできる事ですから、すぐに救い主キリストと結びつけるのは難しい。

ところが「その衣をぶどうの血で洗う」はどうか。「ぶどうの血で」という表現は少しわかりにくいかもしれませんが、とにかく「血」で衣を洗うのですから、これは大変なことです。ろばの子をぶどうの木につなぐことはできても、血で衣を洗うことはできません。救い主キリストはどうですか。十字架におつきになる前、ローマ兵にむちで打たれ、衣は血で染まりました。十字架におつきになられ、そこで肉が裂かれ、血を流されました。

イスラエルの人たちは、ぶどうを育て、その実を収穫し、酒樽の中で実をつぶしてぶどう酒を造っていました。ぶどうをつぶすと血のような色をした汁が出て来ることを知っていました。「ぶどうの血で」、それは「ぶどうのような色をした真っ赤な血で」ということです。キリストが流された血を指します。

このように 11 節のヤコブのことばは、ヤコブの二千年後に救い主キリストが来てくださったことにより実現しました。

ヤコブは、兄をだまし、父をだまし、自分の幸せのためなら何をしてもかまわないと思うような人でした。こんな人間こそ地獄に

行くべきだと思われてもおかしくない人でした。しかし、神はそんなヤコブを大切に思われます。ヤコブを愛し、ヤコブの口をとおして、後に続く人たちに希望を語らせます。根拠のない慰めではありませんでした。彼が語ったことばはすべてそのとおりになりました。

天国に行けるかどうか不安だと私たちは感じているかもしれません。こんな私は神のご用のために何の役にも立たないと思っ
ているかもしれません。私たちの口から、何でも神の救いを疑うことばが出るかもしれない。

でも、ヤコブを見ていただきたい。ヤコブは生涯最後のとき、神の救いの約束を語りました。神がヤコブの口をとおして語ったのです。ヤコブが語ったことばによって、後に続く者たちが大きな励ましをもらうことができた。

同じようなことは私たちにも起こります。この地上のいのちが終わろうとするとき、神は語らせてくださる。「救い主キリストは約束通りにもう一度来てくださる。」自分が言うのではありません。神が言わせてくださる。そのことばによって、私たちの後に続く者たちが励まされていく。

こんな者でも、信仰のないような者であっても、天国に行けない自分だと悲しむ者であっても、神は必ず顧みてくださいます。

恵みを注いでくださる主をあがめたいと願います。